

「文革」が過去になる日はいつなのか？

楊繼繩著／辻康吾編
現代中国資料研究会訳
文化大革命五十年



四六判 318頁
岩波書店
[本体 2,900円 + 税]

三好 章

一九六〇年代後半の現実世界に対するオルタナティブとして「プロレタリア文化大革命」（以下「文革」）に勝手に思いをいたし、憧れを抱いた人々がいた。いまさらのようであるが、K・ブツセが「山のあなたの空遠く」に住むと読んだ「幸」は、その詩と同じく現実には存在しなかっただけでなく、「山のあなた」で展開されていたのは麗しき誤解によって成り立っていた一方的な思い込みとは正反対の、近代人とは縁もゆかりも無い、人間の悪しき本性をむき出しにした、血塗られた事でもであった。だからこそ、「涙さしぐみかへりきぬ」なのであるが、それでもさらに遠くに夢を預け「山のあなた」のなほ遠く／「幸」住むと人のいふ」という見果てぬ夢にしがみつくと、あるいはしがみついていることの自覚を拒否する人々が、二一世紀の今なお存在することもまた、事実である。

「文革」と省略すると何のことやら分からないという学生が、確実に増えている。今年四月、ついに二一世紀生まれの若者が大学生となって入学してきた。彼らには、成立後の人民共和国の歴史もそれ以前の歴史も曖昧な場合がある。もともと、自分が若かったころのことを思い返すと、一方的に彼らの無知を責めても始まるまい。

さはさりながら、中国の歴史的推移の上での現状が、遠い過去と二重写しになって見えることがある。もちろん、観察の当事者である自分自身に主体の問題があるのだから、外在的な原因の一つが共産党自身にあるのではないかという状況が、昨今日に付くようになっていくからである。言うまでもなく、アメリカと対立しつつヨーロッパを視野に入れた「一带一路」に垣間見える「中華帝国」「冊封体制」の再来で

あり、近くは周囲の主権国家に、自らの歴史的観念に由来するだけの「領域」を「国境」として押し付けている、南シナ海での膨張的活動である。内部を見てみれば、管理社会化であり監視社会化の動きである。街中に監視カメラ（防犯カメラ？）が設置され、公安が顔で個人識別可能な情報を持っているがゆえに犯罪検挙が容易になったとか、はたまたネット空間でも不穏当あるいは不都合な書き込みは即座に削除されるとか。筆者のような紙媒体に執着するものにとっては、言論出版の自由の象徴である論壇雑誌が停刊あるいは圧力がかかり、発言の当事者たちが何らかの制裁を受けたと聞くと、安穩としてはいられない。劉暁波が獄死した時もそうだった。「法治」を掲げているはずなのに、自分たちで決めた法くらい、自分たちで守って欲しいと思う。

明治の日本人が「天賦人權」と訳したのは、まさしく正鵠を射ていた。誰も奪えない内面の自由であるはずの信仰の自由さえ、危機に瀕している。政治に関わる人々の間の権力抗争が「腐敗打倒」の名のもとに行われ、「輿論」を背景に刑事罰が課されるとなると、ますますもって我が眼を疑う。江戸時代じゃあるまいし、ましてあれほど傷つき、無数の屍を野にさらした「文革」を経た後なのに。皇帝統治を打破して、民主主義を実現しようとしてきたのではなかったのか。ブル

ジョア民主主義よりも優れていると主張してきたプロレタリア独裁を実践していたのではないか。だが、多数者による少数者への独裁なのだから民主的とは、詭弁の最たるものである。なにより、「文革」の犠牲者に対する弔いは、いまだ終わっていない。いや、これまでにまともに行われたことなどあったのだろうか。文革中に引き回された者と引き回した者とは、「文革」終了後にも同じ「単位」のなかで暮らしている現実には、想像を絶する。現在が歴史から自由ではない以上、中国に関わるものとして「文革」という歴史的事象から自由ではない。

さて、本書は冒頭にも記されているように、楊繼繩の『天地翻覆——中国文化大革命史』（香港、天地圖書、二〇一六年）が底本である。原著は上下二巻、一〇〇〇頁をはるかに超える厚さである。執念の産物としか言いようのない分量である。さすがに、そのままでは翻訳刊行できず、四六版三〇〇頁強に圧縮せざるを得なかった。それでもや、小ぶりのフォント二段組でギッシリと組まれ、近年にない充実した書籍ぶりである。

原著者の楊繼繩は一九四〇年生まれ、文革中に清華大学を卒業、一九六八―二〇〇一年新華社記者、その後改革派雑誌『炎黄春秋』副社長、中国では今なお刊行できない『墓碑』中

国六十年代大飢荒紀実』(香港、天地圖書、二〇〇八年、邦訳『毛沢東大躍進秘録』文藝春秋社、二〇一二年、これも原著二一〇〇頁強、邦訳でも六〇〇頁弱の「抄訳」などを世に問うている。楊は、物心つく頃から政治過多の中国社会で、真摯に現実に向き合おうとしていたからこそ、その変動の波に揺られていたと言っでよいであろう。「大躍進」の犠牲となった三六〇〇万人の中に、楊の父親(養父)も含まれている。『墓碑』、そして本書執筆の問題意識の根柢にある事実である。

歴史としての文革研究である本書の主張は「中国大陆の当局が審査出版した何冊かの「文革史」の基本は、官僚が被った被害の歴史であり、造反派の悪事の歴史である。こうした「文革史」は知識人の被害を紹介してはいるが、知識人への迫害を使賊した者が権力を握る者であったことを指摘してはいない」(v、vi頁)に集約できる。一九八一年の「歴史決議」も、勝ち残った官僚集団による歴史の歪曲と断定し、本書全体を通じて実証する。

本書は三部構成となっており、第一部は楊継繩の未発表書き下ろしである「一小時読懂文革全貌(二時間で分かる文革の全貌)」を加筆修正の上で編集翻訳、第二部は『天地翻覆』より一部を修正抜粋、第三部に『天地翻覆』の「導論」、そ

こに文革関係年表、主要中国人名注を収めている。

「日本の読者へ」と「序文」が本書全体の問題提起であり、先にあげた視点などが示されている。第一部は「文革の起源から終焉まで」。時系列に沿って文革の各段階を整理し、人民共和国成立直後から「文革の起源」が懐胎されていたとする。要するに、人民共和国成立当初からの集権制度が官僚集団によって広範な大衆を抑圧するシステムとして機能し、政治イデオロギーに名を借りた官僚内部の権力抗争が、極めて品のない「証明」まで用いて行われていた。彭德懷・羅瑞卿・陸定一・楊尚昆への罵倒、吊し上げは周恩来が批准し、「四旧」一掃などの派手な街頭行動は高級幹部の子弟による「老紅衛兵」のしわざであった。毛沢東は、自らのユートピア実現のために必須な権力掌握のための手段としてしか文革を考えていなかった。だから、毛沢東は文革を操ろうとしていた。しかし、無理な注文であった。毛沢東は看板を変えただけの組織である革命委員会で混乱の收拾を図り、造反派を強制的に解散させた。この文脈から、「下放」された紅衛兵たちの農村での扱いは、容易に想像がつく。早い話が、用済みとして切り捨てられたのである。そうなれば、復権した「実権派」による「造反派」への復讐である。実際に血を流したのは造反した「大衆」であった。文革そのものが表面的に終結して

も本質的な社会構造は変化しなかったことを意味する。四人組裁判についても、「判事は臨時に呼び寄せた者で、その多くは法律を知らない官僚で、……弁護士は当局が委任した者で、事前に当局は弁護士に、公訴側の提出する「事実は何も変更不能」であり、……「罪名」は変えられないことを認めるよう要求した」（一〇三頁）。楊繼繩ならずとも、真つ当な裁判ではないと見なすのが当然である。推定無罪の原則など存在しない、シナリオ通りの政治裁判であった。

第二部は「ポスト文革の中国」。復権した「実権派」による復讐が、文革初期の「造反派」に加えられたが、その復讐は文革最初期に造反派が展開した官僚批判という歴史的事実を否定するものであると指摘される。復讐はやがて範囲を拡大させ、全国で一〇〇万人以上が四人組との関係で摘発された。「復讐」の詳細な事例は、文革期の「実権派」打倒キャンペーンと方向が違うだけで、実態に違いはない。鄧小平は文革の清算対象を「造反でのし上がった者、派閥思想に凝り固まった者、殴打・破壊・略奪を働いた者」の「三種人」に限定したが「ダブルスタンダード」があり、中央指導層に近い老幹部とその子弟には甘く、許世友や韋国清などはおとがめなしであった。

それでも、華国鋒失脚の原因である「真理の基準の大議論」はやはり毛沢東に対する迷信を打ち砕くことにな（一六八頁）り、「六四」に到る道を開いた。楊繼繩自身の見た「西単の民主の壁」は「民主の波」であった。しかし、希望は「改革開放」当初からの矛盾で裏切られる。「改革開放」の主導権を握った官僚集団と、一般大衆との矛盾である。文革での「官僚集団の苦しみは大衆から激しく降りかかって来たものであり、大衆の苦しみは全体主義制度の残酷さから来たものだった」（一七六頁）からである。「同床異夢」である。結局、鄧小平の「四つの基本原則」で一九四九年以来の体制が堅持された。立ち遅れた経済活性化には市場経済導入しかなかったが、それは「文革の最終勝利者である官僚集団」が採用した現代版「中体西用」論であった。この「権力市場制度」の実態は、肥大化する官僚組織と人員、貧富の格差の拡大となって現れた。身も蓋もない鄧樸方の発言「改革というのは能力のある人間が国から利益を得ることだ。……どうしたって一部の有能な者から裕福になるのはそのあとだ」（一九〇頁）。「有能な」鄧樸方は、文革で造反派に迫害され、障害を負った鄧小平の息子、「紅二代」「太子党」である。階層が「集団世襲」され、新たな身分制社会が誕生した。「紅二代」などに加え、「官二代」（役人二代目）、「富二代」（金持ち二代目）、さ

らに「窮二代」（貧乏二代目）など。共産党が散々批判してきた民国期の、あるいは「封建主義と帝国主義」に虐げられた人々が、二一世紀に再登場している。「官民の矛盾と労資の矛盾」では、官制組合である総工会が一般労働者に敵対している。

第三部は「文革五十年の総括」。文革は単なる権力闘争ではなく、毛沢東の目指すユートピア理念が根柢にあり、現実を無視した「継続革命論」が悲劇を生み、熱狂的大衆運動の中で自滅した。これを可能にしたものこそ「建国後十七年の社会制度」であった。毛沢東自身、「官僚集団の一員であっても、彼が率いる官僚たちと同じではない」（二二八頁）。「文革は毛沢東、造反派、官僚集団が織りなしたトライアングルのゲームであり、このゲームの最後の結末では官僚集団こそが勝者となった。敗者は毛沢東であり、敗者のツケを払わされたのが造反派」（二三四頁）であり、結局、文革前の「旧制度」が「完全復活」した。けれども、共産党への「奴隷型服従」への疑問と批判が大衆レベルで懐胎され、歴史の発展法則も共産主義も信じない人々が析出していったことが「六四」の基調にある。こうした中国の現状を変えるには「立憲民主」が必要なのだ、と結論付ける。この結論は、清末の変法派あるいは新政当時の立憲派に通ずるものがある。とすれば、現状は専制体制

なのである。確かに、現在の人民共和国には憲法が存在する。だが、党の指導性を明記してある以上、党は憲法の上にある。これでは外見的立憲制ではないか。前近代中国の国家と社会の分離、それを中間団体が結んでいたとする議論は一定の説得力を持つ。そうした社会では、岡本氏によれば、国家は民を徴税の対象とのみみなし、奉仕の対象とは考えなかった（岡本隆司『腐敗と格差の中国史』NHK出版、二〇一九年）。主権者に対して奉仕することを国家の機能とする国民国家ではなかったからである。法のもとでの平等を前提とする均質な国民が形成されていなかったからである。身分制社会であったからである。革命も「命革まる^{めい}」であってrevolutionではなかったのである。トロツキーが一九二〇年代の中国共産党の指導する農民運動に支えられた北伐軍を「軍服を着た太平天国軍」と称したのは、炯眼であった。そうした農民を支持基盤に権力を掌握した中国共産党は、成立後七〇年の今になっても「三農問題」などと言っている。農村は一貫して収奪の対象であり、奉仕の対象ではない。恩知らずである。農村でも、多くの人々が官にできるだけ近い位置を占めようと必死になり、学歴の階梯を駆け上がるかと血道を上げる。一族の榮譽と富貴のために寝る間を惜しんで勉学に励むのは、宋朝真宗皇帝作「勸学歌」の世界であった。これと、「高考」の悲喜劇と

はどれ程違うのか。

文革は権力抗争であり、実質的に皇帝となった毛沢東のユートピア理念の追求であり、家臣の抵抗であり、大衆的暴力による大流血であり、中国の持つ前近代性の露呈であったと見ることが出来る。一方で、権力の暴走を抑え得る、外形的でない立憲制を志向する人々の存在は、箱の隅で震えている「希望」であると信じていたい。

本書は文革を漢族の世界の中で捉えている。グローバルな視点もそうであるが、漢族以外の民族地域でのジェノサイドなどは、言及されていない。原著者の関心から已むを得ないのかもしれないが、中国国内でも非漢族世界での文革の惨害についてあきらかにされつつある。それらは文革どころかそれ以前、人民共和国、民国成立に到る視野を持っている。孫文が掲げた「民族主義」が「駆除韃虜」に始まり、それが「五族共和」と書き替えられたところで本質に変化はなかった。言及せよとまでは言わないが、問題の存在は指摘してほしかった。

なお、本書に関しては四月一三日付日経新聞の国分良成氏など、多くの書評が高い評価を与えていることを附記しておきたい。

(みよし・あきら 愛知大学)

展覧会のご案内

日中文化交流協定締結40周年記念

特別展 三国志

東京国立博物館

会期…七月九日(火)～九月一六日(月・祝)

※月曜…七月一六日は休館、但し七月一五日・八月二日・九月一六日は開館。

会場…東京国立博物館(JR上野駅公園口・鶯谷駅南口より徒歩10分)

開館時間…9時半～17時(入館は閉館30分前まで) ※金・土曜

は、21時まで開館。

観覧料…一般一、六〇〇円、大学生一、二〇〇円、高校生九〇〇円、中学生以下無料。

九州国立博物館

会期…一〇月一日(火)～二〇二〇年一月五日(日)

※月曜休館、但し祝休日の場合は開館、翌平日が休館。および一二月三日～三一日は休館。

会場…九州国立博物館(西鉄太宰府駅より徒歩10分)

開館時間…9時半～17時(入館は閉館30分前まで) ※金・土曜

は、20時まで開館。

観覧料…一般一、六〇〇円、高大生一、〇〇〇円、小中生六〇〇円。

みどころ…本展では、選りすぐりの文物と最新の研究成果をまじえてその実像に迫り、これまでの三国志を超えた考古学ならではの、新たな三国志像の構築を目指す。

全作品写真撮影OK(フラッシュ・三脚等は使用不可)。